

『往生要集』講読(十三)

一 問答料簡②粗心妙果以降 一

梯 信 暁

第六に粗心の妙果といふは、問ふ(1)、もし菩提のために、仏において善をなすは、妙果を証得すといふこと、理かならずしかるべし。もし人天の果のために善根を修せば、いかにぞ。答ふ。あるいは染、あるいは浄、仏において善を修せば、遠近ありといへどもかならず涅槃に至る。ゆゑに『大悲經』の第三に、仏、阿難に告げてのたまはく、「もし衆生ありて、生死三有の愛果に染着して、仏の福田において善根を種うるもの、かくのごとき言をなさく、この善根をもつて、願はくはわれ般涅槃することなからん」と。阿難、この人もし涅槃せずといはば、この処あることなからん。阿難、この人、涅槃を染求せずといへども、しかも仏所にしてもろもろの善根を種えれば、われ説く、この人はかならず涅槃を得ん」と。

問ふ(2)。所作の業は願に随ひて果を感ず。なんぞ、世報を染ふに出世の果を得ん。答ふ。業果の理は、かならずしも一同ならず。もろもろの善業をもつて仏道に回向するは、これすなはち作業なれば、心に随ひて転ず。鶉狗の業をもつて天の業を染求するは、これすなはち愚見なれば、業をして転せしめず。このゆゑに、仏においてもろもろの善業を修せば、意業は異なりといへどもかならず涅槃に至る。ゆゑにかの『經』に譬へを挙げてのたまはく、「たとへば、長者の、時によりに種を良田のなかに下し、時に随ひて澆ぎ灌ぎて、つねによく護持せん。もしこの長者、余の時のうちに、かの田所に到りてかくのごとき言をなさく、^咄なるかな、種子。なんち種となることなかれ、生ずることなかれ、長ずることなかれ」と。しかも、かれ、種を種えつれば、かならず果をなすべし、果実なきにあらずらんがごとし」と取意略抄。

問ふ(3)。かれ、いつれの時においてか般涅槃を得ん。答ふ。たとひ、久々に生死に輪廻すといへども、善根亡ぜずしてかならず般涅槃を得。ゆゑにかの『經』にのたまはく、「仏、阿難に告げたまはく、^{捕魚の師}、魚を得んがためのゆゑに、大きな池の水にありて、釣餌を安置して、魚をして呑み食はしめつ。魚呑食しをはりて、池のなかにありといへども、久しからずしてまきに出づべきがごとし

乃至阿難、一切衆生、諸仏の所にして敬信を生ずることを得、もろもろの善根を種え、布施を修行し、乃至、心を発して、一念の信をも得れば、また余の悪・不善業のために覆障せられて、地獄・畜生・餓鬼に墮在すといへども乃至諸仏世尊、仏眼をもつてこの衆生の発心の勝れたるを觀見したまふがゆゑに、地獄よりこれを抜き出さしむ。すでに抜き出しをはりて、涅槃の岸に置きたまふ」と。

問ふ(4)。かくのごとき『經』の意は、敬信せるをもつてのゆゑに、つひに涅槃を得るなり。もししからば、ただ一たび聞くは、涅槃の因にあらざるべし。すでにしからば、いかにぞ『華嚴』の偈にのたまふ、

「もしもろもろの衆生ありて、いまだ菩提心を發さざれども、

一たび仏の名を聞くことを得れば、決定して菩提を成す」と。

答ふ。諸法の因縁は不可思議なり。たとへば、孔雀の、雷霆の声を聞きてすなはち身あることを得、また戸利沙果の、先より形質なけれども、昂星を見る時に、果すなはち出生して、長さ五寸に足るがごとし。仏の名号によりて、すなはち仏因を結ぶことまたかくのごとし。この微因よりつひに大果を著す。かの尼拘陀樹の、芥子ばかりの種より枝葉を生じて、あまねく五百両の車を覆ふがごとし。淺近の世法すらなほ思議しがたし。いかにいはんや、出世の甚深の因果をや。ただ信仰すべし。疑念すべからず。

問ふ(5)。染心をもつて如来を緣するものもまた利益ありや。答ふ。『宝積經』の第八に、密迹力士、寂意菩薩に告げていはく、「善城医王、もろもろの薬を合集して、もつて薬草を取りて童子の形を作る。端正殊妙にして、世の希有なり。所作安諦にして、所有究竟し、殊異なること比ひなし。往來し、周旋し、住立し、安坐し、臥寐し、経行するに、欠漏するところなく、顛變するところの業あり。あるいは大豪の国王・太子・大臣・百官・貴姓・長者ありて、善城医王の所に來到するに、薬の童子を視て、ともに歌ひ戯れて、その顔色を相るに、病みな除くることを得て、すなはち安穩寂靜にして、無欲なることを致す。寂意、しばらく、その善城医王の、世間を療治するに、その余の医師の及ぶことあたはざることを觀ぜよ。かくのごとく、寂意、もし菩薩、法身を奉行すれば、たとひ衆生の、

婬・怒・痴盛りにして、男女・大小、欲望をもつて慕樂し、すなはちともにあひ娛樂すれども、貪欲の塵勞はことごとく休息することを得」と陰種踏入なしと信解し觀察するを、すなはち「奉行法身」と名づく。奉行法身の菩薩すらなほしかり、いかにいはんや法身を証得せる仏をや。

問ふ(6)。欲望をもつて緣するに、この利益あるがごとく、誹謗し惡厭するもま

た益ありや。答ふ。すでに婬・怒・痴といへり。明らけし、ただ欲想のみにはあらず。また『如来秘密藏經』の下巻にのたまはく、「むしろ如来において不善業をば起すとも、外道・邪見のもの所において供養を施作せざれ。なにをもつてのゆゑに。もし如来の所において不善業を起さば、まさに悔ゆる心ありて、究竟してかならず涅槃に至ることを得べし。外道の見に随ふは、まさに地獄・餓鬼・畜生に墮つべし」と。

問ふ(7)。この文は、すなはち因果の道理に違せり。また衆生の妄心を増す。いかなぞ、悪心をもつて大涅槃業を得んや。答ふ。悪心をもつてのゆゑに三悪道に墮つ。一たび如来を縁するをもつてのゆゑにかならず涅槃に至る。このゆゑに因果の道理に違せず。いはく、「かの衆生、地獄に墮する時に、仏において信を生じ、追悔の心を生ず。これによりて、展転してかならず涅槃に至る」と『大悲經』に見えたり。染心に如来を縁する利益すらなほかくのごとし。いかにいはんや、淨心にして一たびも称せんをや。仏の大恩徳、これをもつて知りぬべし。

問ふ(8)。諸文に説くところの菩提・涅槃は、三乗のなかにおいて、これいづれの果ぞ。答ふ。初めには機に随ひて三乗の果を得といへども、究竟してはかならず無上の仏果に至る。『法華經』にのたまふがごとし。

「十方仏土のなかには、ただ一乗の法のみあり。

二もなくまた三もなし。仏の方便の説をば除く」と。

また『大經』に、如来の決定の説義を明かしてのたまはく、「一切衆生はことごとく仏性あり。如来は常住にして変易あることなし」と。またのたまはく、「一切衆生は、さだめて阿耨菩提を得るがゆゑに、このゆゑに、われ、一切衆生はことごとく仏性ありと説く」と。またのたまはく、「一切衆生はことごとくみな心あり。おほよそ心あるものは、さだめてまさに阿耨菩提を成ずることを得べし」と。

問ふ(9)。なんがゆゑぞ、諸文の所説異なる。あるいは「一たび仏の名を聞かば、さだめて菩提を成ず」と説く。あるいは「勤修すること、頭燃を救ふがごとくすべし」と説く。また『華嚴經』の偈にのたまはく、

「人の、他の宝を数ふるに、みづから半銭の分なきがごとく、

法において修行せざるは、多く聞くとともにまたかくのごとし」と。

答ふ。もしみややかに解脱せんと欲はば、勤めずは分なきがごとし。もし永劫の因を期せば、一たび聞くとともにまた虚しからず。このゆゑに、諸文は、理、相違せず。

(1) 第一問答 人天の果を目指して修行する凡夫は、悟りを得られるのか否かと問ひ、答えて、煩惱があらうとなかろうと、仏果を得るにふさわしい善を修する者は、いずれ必ず悟りに至ると言う。その文証として、仏果を得るにふさわしい善を修する者は、たとえ三有(三界すなわち娑婆)に再生することを熱望していても、必ず仏の悟りを得るだらうと説く、『大悲經』卷二(『大正藏』一一、九六〇頁上)の文を挙げてゐる。

(2) 第二問答 第一問答を承け、それは「行為は願に依じて果を招く」という道理に背くのではないかと重ねて問う。答えて、願によって回向しても、有効な場合とそうでない場合とがあると言ひ、前項に挙げた『大悲經』卷三(『大正藏』一一、九五九頁下)九六〇頁上)の一連の文中に見える譬喩を挙げてゐる。

(3) 第三問答 第一・第二問答を承けて、世俗の利益を願う者が、仏果を得るにふさわしい善を行った場合、彼が悟りを得られるのはいつの時かと問う。答えて、一旦行った善の種は、永遠に消えることがないので、その後の悪業によって悪道に墮ちたとしても、やがて必ず悟りに到達できると言う。文証として、前項同様『大悲經』卷三(『大正藏』一一、九五九頁中)の文を挙げてゐる。

(4) 第四問答 前三問答に文証として挙げられた『大悲經』の教説によると、凡夫が仏道を成就するためには敬信の心を持っていなければならないということになる。では、『華嚴經』卷二十三(八〇巻本、『大正藏』一〇、一二四頁上)の偈に、たった一度仏名を聞いただけで悟りを成就すると説かれてゐるのはなぜかと問う。答えて、諸法の因縁は不可思議であり、我らの考えの及ばない境界であるから、仏語を信仰せよと言ふ。三つの譬喩を挙げているが、その第一・第二・三孔雀と戸利沙果(ネムの木の実)の譬喩は、前節「臨終念相」の第四問答にも言及されている。また、尼拘陀樹の譬喩は、『大智度論』卷八(『大正藏』二五、一五五頁中)等に見えらる。

(5) 第五問答 煩惱の心をもって如来との縁を結ぶ者にも利益はあるのかと問う。答えて、まず『大宝積經』卷八(『大正藏』一一、四五頁下)に見える名醫善婆の譬喩を引用する。そこには、真如にかなった行動(原文は「奉行法身」)をする菩薩を縁として行動すれば、凡夫が欲望のままに振る舞おうとも、その煩惱はすべて沈静すると説かれてゐる。それによって源信は、菩薩でさえもそれほどの影響力を持つものだから、まして真如を証得した仏を縁として行動するならば、それが煩惱の心によるものであったとしても利益があるのは明白であると述べてゐる。真如は周囲の者に良い影響を与えるので、それに関与する者は、たとえ煩惱の心を持つ凡夫であろうとも悟りへと導かれてゆくことを主張するのであ

る。「他力」の思想を述べたものと評価できよう。

(6) 第六問答 第五問答を承けて、誹謗し嫌悪するというような形で仏に関与する者の利益はどうかと問う。答えて、三毒煩惱が許されることはすでに明白であると言ひ、加えて『如来秘密藏經』卷下(『大正藏』一七、八四三頁下)の文を引用する。そこには、仏に向かつてさえいれば、如何なる悪業を起こそうとも滅罪の機会はあるが、外道や邪見の者に随えば、ただ悪道に墮ちるのみであると説かれる。煩惱による悪業が許されるのは、仏教の範疇においてのみであることが再確認されているのである。

(7) 第七問答 第六問答に引用された『如来秘密藏經』の、悪心によって涅槃を得るといふ教説は因果の理に反するのではないかと問う。答えて、悪道に墮ちるべき者が如来の縁によって方向転換されるということなので、因果の理に反することは無いと言ひ、その文証として、『大悲經』卷一(『大正藏』一一、九四九頁中)の文を略抄する。加えて源信が私見を加え、淨心より発せられる一遍の称名の利益が絶大であること、それが仏の大恩徳のはたらきによることを述べている。

(8) 第八問答 淨土教が目指す証果は、三乗教の中ではどれに当たるのかと問う。答えて、『法華經』(卷一、『大正藏』九、八頁上)より「一乘眞実・三乗方便」の教説、北本『涅槃經』卷二十七(『大正藏』一一、五二二頁下、五二四頁中、五二四頁下)より「一切衆生悉有仏性」の教説を引用し、目指すところは阿耨多羅三藐三菩提であることを主張する。

(9) 第九問答 諸經の中には、たった一度の聞名で良いと説くものがあり、また厳しい修行を求めるものもある。その違いはなぜかと問う。答えて、頓悟を目指す者は厳しい修行が必要であるが、遠い未来を期するのであれば、たった一度の聞名も決して無駄にはならない。よって教説の相違は理に契っていると云う。源信は、聞名のみでは即得往生の因とはならないと考えていたようである。

【現代語訳】

第六に「粗心妙果」、煩惱を伴う世俗の心で修行する者が得られる勝れた成果について。

問う。仏の悟りを目指し、悟りを得るにふさわしい善を行う者が、勝れた成果を得られるということは道理にならなっている。しかし人間や天上に生まれることを目指して善を行う者の成果はいかなるものか。

答え。心に煩惱の汚れがあるうがなかるうが、仏の悟りを得るにふさわしい

善を行うならば、遅速の差はあるが、いずれ必ず悟りを得られる。だから『大悲經』卷三に、釈尊が阿難に次のおっしゃっている。「どうしてもまた娑婆世界に生まれてきたいと熱望する者が、仏の悟りを得るにふさわしい善を行い、〈この善によって私が仏の悟りを得ることがありませんように〉と願ったとしても、阿難よ、もしこの者が悟りを得られなかったら、それは道理にならぬ。阿難よ、たとえ仏の悟りを願わなくても、悟りを得るにふさわしい善を行う者は、必ず悟りを得られるであろう」と。

問う。行為は願いに応じて果報を招くものである。どうして世俗の利益を願う者が悟りの果を得られるのか。

答え。行為が果報を招く道理は、必ずしも一律ではない。様々な果を招くべき種々の善の果を、すべて仏の悟りという一つの目標に差し向けようとするならば、これは「回向」という有効な行為なので、その意思に応じて目標の転換は可能である。しかし鶏や犬の鳴き真似をすることによって、天上界に生まれて楽しい暮らしをしたいと願うような者は、その考えそのものが間違っている。行為の目標を転換することはできない。そういうわけで、悟りを得るにふさわしい善を行う者は、願いの方向は違っても、必ず悟りを得られるであろうと説かれるのである。その根拠として、『大悲經』には次のような譬えが挙げられている。「たとえ長者が、時期を違えずよく肥えた畑に種をまき、適切に水をやり、常に大切に世話をしたとしよう。もしこの長者が、あるとき畑で、〈おいこら種よ、お前は種であってはならない。芽を出してはいけない。生長してはいけない〉と言ったとしても、長者が種を植えたのだから、必ず実を結ぶだろう。実ができてはならない。それと同じことである」と省略して引用した。

問う。世俗の利益を願う者が、仏の悟りを得るにふさわしい善を行ったとして、彼が悟りを得られるのはいつの時か。

答え。たとえ何度生死輪廻を繰り返そうとも、善の種は消えることがないので、いずれ必ず悟りを得られる。だから『大悲經』に次のように説かれるのである。「釈尊が阿難に告げられた。〈漁師が魚を釣ろうと大きな池にやってきて、釣り針に餌をつけて糸を垂らし、それを魚に呑み込ませることができたとしよう。餌を呑み込んでしまった魚は、しばらくはそのまま池の中で泳いでいるけれども、やがて必ず池から引き上げられることになろう。それと同じことである。中略阿難よ。如何なる者も、仏の導きにより敬いの心をもって教えを信受することができようにならなれば、様々な善を行い、施しを実践し、やがて菩提心を発して、わずかでも眞実の心を得られたならば、その後悪を行って眞実の心を見失い、地獄・

餓鬼・畜生の世界に堕ちたとしても、中略多くの仏が慈愛の眼まなこによって、彼の発した菩提心のすばらしさを忘れることなく見をなわすので、地獄から彼を救い出し、やがて悟りの世界へと導いてくださるのである」と。

問う。『大悲経』の教説によると、敬いの心をもって教えを信受することができようになつた者は、いずれ悟りを得られるということである。とすると、たつた一度だけ仏法を聞いたというだけでは、悟りの因とはならないだろう。なのに『華嚴経』の偈に、

「いまだ菩提の心なく

修行もしない者でさえ

ひとたびほとけの名を聞けば
かならず悟りを得るだろう」

と歌われているのはなぜか。

答え。因果の道理は我らの心でははかり知ることができない。たとえば、孔雀が雷の音を聞いて孕んだり、尸利沙果シラカがスバルを見て突如実を結び、あつという間に五寸もの大きさになつたりするようなものである。仏の名号によって即座に悟りの因を結ぶことも、これと同じである。わずかの因によって大きな果が現れることもある。尼拘陀樹ニグダの種子は芥子粒ほどの大きさだが、そこから枝葉をのばして、やがては五百両の車を覆い尽くすほどになるようなものである。我らの身近にある世間の事でさえ、はかり知ることが難しいのに、まして仏の悟りの境界の奥深い因果のことはなおさらである。ただ仏の言葉を仰ぎ信受せよ。疑つてはならない。

問う。煩惱の心をもって如来との縁を結ぶ者にも利益はあるのか。

答え。『宝積経』巻八に、密迹力士みつしやくが寂意菩薩じやくいに対して次のように述べている。「名医菩薩ないうしが、様々な薬を調合し、薬草を材料として童子の像を造つた。その容姿はこの上なく端麗で、世にも希なる美しさであった。身のこなしは優雅で、欠点一つもない。前後左右に動き、坐つたり寝たり、歩くこともできた。何の不自由もなく、何でもできた。大国の王や太子をはじめ、大臣・官僚・貴族・長者たちが菩薩の家にやってきて、薬草の童子を見て共に歌い遊ぶと、みな顔色が良くなつて、病は癒え、心が安らぎ欲望がなくなるのである。寂意菩薩よ、名医菩薩が世間の人々の病を癒す能力は、ほかのどんな医者よりも勝れている。その有様をしばし観念せよ。これと同じく、もし菩薩が真如に契つた行動をするならば、そのまわりの人々は、たとえ愛欲や怒りや愚かしさに満ちていようとも、男も女も大人も子供も、欲望をむき出しにして求め合い戯れあおうとも、煩惱による弊害はすべて静められるのである」と一切のものは実体がないことを理解できる智慧の目で見ることこそ、「真如にかなつた行動」と名づけるのである。真如にかなつた行動をする菩薩でさえ

も、まわりの人々を悟りへと導いてゆくのである。まして真如の理を体得した仏であれば、なおさらのことである。

問う。欲の心によって仏との縁を結ぶ者にも、このような利益が得られるのなら、それと同様、仏を誘ひ嫌い避ける者にも利益はあるのか。

答え。「たとえ愛欲や怒りや愚かしさに満ちていようとも」と説かれていたではないか。欲の心だけが許されるのではないことは明白である。『如来秘密藏経』の下巻に、次のように説かれている。「たとえ如来に向かつて不善の行いをなそうとも、仏教徒以外の者や仏教に悪意を持つ者に対して敬意をもって供え物をしてはならない。なぜかという、如来に対して不善の行いをなせば、必ず後悔の心が起こつて、最終的には悟りへと導かれてゆくことが可能である。しかし仏教徒以外の者の教えに随う者は、かならず地獄・餓鬼・畜生の世界に堕ちてゆくであろう」と。

問う。前掲の経文は、因果の道理に反し、人々の迷いを助長する。悪心によって大いなる悟りの楽しみを得られるとは何事か。

答え。悪心によって三悪道に堕ちるような者が、一度でも如来と縁を結べば、必ず悟りへと導かれると言うのである。よって因果の道理に反することはない。経に、「地獄に堕ちようとする時に、仏に信順する心を生じ、後悔の念を生ずるならば、それによって彼は方向を転じて、必ず悟りに向かうだろう」とある。「大悲経」に見える。煩惱の心をもって如来と縁を結ぶ者でもこれほどの利益が得られるのである。まして清らかな心で一度でも仏名を称える者の利益はなおさらである。仏の大いなる御恩の力が、これによって明白となつただろう。

問う。本書所掲の諸文に説かれる「菩提・涅槃」の証果は、大乘・小乗の諸教で設定される証果の中、どれに当たるのか。

答え。修行の過程では、大乘・小乗の修行者の能力にしたがつて、阿羅漢や辟支仏というような証果も設定されているが、最終的にはみな必ず最高の仏の悟りに到達する。『法華経』には、次のように歌われている。

「すべてのほとけのみ教えの

二・三の門を開くのは
すべてのもを救うため」と。

また『涅槃経』には、如来が確信をもって説く教えを示して、「あらゆる生き物には仏となる素質がある。如来は永遠にして不変である」と述べられている。同じく『涅槃経』に、「あらゆる生き物は、必ず最高の悟りを成就できる。だからこそ私は、あらゆる生き物には仏となる素質があると説くのである」と言い、「あらゆる生き物には心がある。心あるものは必ず最高の悟りを成就することが

「できる」と言う。

問う。なぜ諸経の教説に違いがあるのか。ある経には、「たった一度仏の名を聞くだけで必ず悟りを成就する」と説き、またある経には、「髪の毛についた火を振り払うような気持ちで、命がけで修行に努めよ」と説く。また『華嚴經』には、次のように歌われている。

「人の財産数えても

仏道修行もまた同じ

一文も手に入らない

聞いてるだけでは意味がない」と。
 答え。はやく悟りを得たければ、努力しなければ結果は望めない。遠い未来の証果を目指すのであれば、たった一度仏の名を聞くことも無駄にはならない。よって教説の相違は道理に反することはない。

~~~~~◇~~~~~

第七に諸行の勝劣といふは、問ふ(一)、往生の業のなかには念仏を最となすも、余の業のなかにおいてもまた最となすや。答ふ。余の行法のなかにおいても、これまた最勝なり。ゆゑに『観仏三昧經』に六種の譬へあり。「一にはいはく、仏、阿難に告げたまはく、『たとへば、長者の、まさに死なんとすること久しからずして、もろもろの庫藏をもつてその子に委付す。その子、得をはりて、意に随ひて遊戯す。たちまちに一時に、王難あるに値ひて、無量の衆賊、藏の物を競ひ取る。ただ一の金あり。すなはちこれ閻浮檀那紫金にして、重さ十六兩なり。金錠の長短また十六寸なり。この金の一两の価は、余の宝の百千萬兩に直る。すなはち穢らはしき物をもつて真金を纏ひ裹みて、泥団のなかに置きつ。もろもろの賊見をはりて、これ金と識らずして、脚をもつて踐みてしかも去りぬ。賊去りて後に、財主、金を得て、心大きに歡喜せんがごとし。念仏三昧もまたかくのごとし。まさにこれを密藏すべし』と。二にはいはく、へたとへば、貧人、王の宝印を執りて、逃げ走りて樹に上りぬ。六兵これを追ふに、貧人、見をはりてすなはち宝印を呑みつ。兵衆疾く至りて、樹をして倒僻せしむ。貧人、地に落ちて、身体散壊しぬれども、ただ金印はあるがごとく、念仏の心印も壞れざること、またかくのごとし。三にはいはく、へたとへば、長者の、まさに死なんとすること久しからずして、一の女子に告ぐらく、『われいま宝あり。宝のなかに上れたるものなり。なんぢ、この宝を得て、密藏して堅からしめよ。王をして知らしむるこ

となかれ』と。女、父が勅を受けて、摩尼珠およびもろもろの珍宝を持ちて、これを囊穢に藏す。室家の大小、みなまた知らず。世の飢饉に値ひて、如意珠を持ちて、語に随ひて、すなはち百味飲食を雨らす。かくのごとくして、種々に意に随ひて宝を得るがごとし。念仏三昧の聖心不動なることまたかくのごとし。四にはいはく、へたとへば、大きに旱して雨を得ることあたはず。一の仙人ありて呪を誦す。神通力のゆゑに、天より甘雨を降らし、地より涌泉を出すがごとし。念仏を得たるものは善呪の人のことし。五にはいはく、へたとへば、力士、しばしば王法を犯して囹圄に幽閉せらるるに、逃げて海辺に到り、髻の明珠を解きて、持ちて船師を雇ひ、かの岸に到りて、安穩にして懼れなきがごとし。念仏を行ずるものは大力士のごとし。心王の鎖を挽かれて、かの慧の岸に到る。六にはいはく、へたとへば、劫尽きて大地洞然するに、ただ金剛山のみ摧破すべからずして、還りて本際に住するがごとく、念仏三昧もまたかくのごとし。この定を行ずるものは、過去の仏の實際の海のなかに住す」と以上略抄。また『般舟經』の「問事品」に念仏三昧を説きてのたまはく、「つねにまさに習持し、つねにまさに守りて、また余の法に随はざるべし。もろもろの功德のなかに最尊第一なり」と以上。また不退転の位に至るに、難易の二の道あり。易行道といふはすなはちこれ念仏なり。ゆゑに『十住婆沙』の第三にいはく、「世間の道に難あり易あり。陸道の歩行はすなはち苦しく、水道の乗船はすなはち楽しきがごとし。菩提の道もまたかくのごとし。あるいは勤行精進のものあり、あるいは信方便の易行をもつて、疾く阿惟越致に至るものあり。乃至阿弥陀等の仏および諸大菩薩、名を稱して一心に念ずれば、また不退転を得」と以上。文のなかに、過去・現在の一万余の仏、弥勒・金剛藏・淨名・無尽意・跋陀婆羅・文殊・妙音・師子吼・香象・常精進・觀世音・勢至等の一百余の大菩薩を挙げたり。そのなかに広く弥陀仏を讃せり。もろもろの行のなかに於いて、ただ念仏の行のみ修しやすくして、上位を証す。知りぬ、これ最勝の行なりといふことを。また『宝積經』の九十二にのたまはく、「もし菩薩ありて、多く衆務を営み、七宝の塔を造ること、三千大千世界に遍滿せんに、かくのごとき菩薩は、われをして歡喜をなさしむることあたはず。またわれを供養し恭敬するにもあらず。もし菩薩ありて、波羅蜜相應の法において、乃至、一の四句の偈を受持し、誦誦し、修行して、人のために演說せん。この人は、すなはちわれを供養しつとなす。なにをもつてのゆゑに。もろもろの仏の菩提は、多聞より生ず。衆務よりはしかも生ずることを得ず。乃至、もし一閻浮提の、堂事の菩薩は、一の誦誦・修行・演說の菩薩の所において、まさに親近し供養し承事すべし。もし一閻浮提の、誦誦・修行・演說のもろもろの菩薩

等は、一の勤修禪定の菩薩において、またまさに親近し供養し承事すべし。かくのごとき善業をば、如来随喜し、如来悦可したまふ。もし勤修智慧の菩薩において承事し供養せば、まさに無量の福德の聚を獲べし。なにももつてのゆゑに。智慧の業は無上最勝にして、一切の三界の所行に超過すればなり」と云々。

『大集』の「月蔵分」の偈にのたまはく、

「もし人、百億の諸仏の所にして、多くの歳数においてつねに供養せんに、もしよく七日、闍若にありて、根を撰して定を得ば、福かれよりも多し乃至閑静無為なるは仏の境界なり。かしこにおいてよく浄菩提を得。」

もし人、かの住禪のものを誑らば、これをもるもの如来を毀謗すと名づく。

もし人、塔を破ること多百千、および百千の寺を焚焼せんに、

もし住禪のものを毀謗することあらば、その罪はなほだ多きこと、かれより過ぎたり。

もし住禪のものに、飲食・衣服および湯薬を供養することあらば、この人無量の罪を消滅して、また三惡道に墮せじ。

このゆゑにわれいまあまねくなんぢに告ぐ、仏道を成せんと欲はばつねに禪にあれ。

もし阿蘭若に住することあたはずは、まさにかの人を供養すべし」と以上。

汎爾の禪定すら、なほすでにかくのごとし。いはんや、念仏三昧はこれ王三昧なるをや。

問ふ(2)。もし禪定の業は誦誦・解義等に勝れたらば、いかんぞ、『法華経』の「分別功德品」に、八十万億那由他劫の所修の前五波羅蜜の功德をもつて、『法華経』を聞きて一念信解する功德に校量して、百万億分の一分なりとする。いかにはんや、広く他のために説かんのをや。答ふ。これらのものもの行に、おのおの浅深あり。いはく、偏円の教、差別あるがゆゑに。もし当教にて論せば、勝劣は前のごとし。もし諸教を相対せば、偏教の禪定は円教の誦誦事業に及ばず。『大集』と『宝積』とは一教に約して論じ、『法華』の校量は偏円相望す。このゆゑに諸文の義、相違せず。念仏三昧もまたかくのごとし。偏教の三昧は当教に勝れたりとなす。円人の三昧はあまねく諸行に勝れたり。また定に二あり。一は慧相應の定。これを最勝なりとなす。二は暗禪。いまだ勝れたりとなすべからず。念仏三昧はこれ初めの撰なるべし。

(1) 第一問答 往生極樂以外のことを目標とする場合でも念仏は最勝の修行であるのかと問う。答えて、念仏が最勝であると言う。文証としてまず、『観仏三

味海経』卷十(『大正蔵』一五、六九五頁中)より六つの譬喩を用いる。いずれも念仏三昧の功德が永遠に不壞であることを説くものである。次いで『般舟三昧経』卷上(『大正蔵』一三、九〇四頁中)より、念仏三昧の功德を諸功德中最尊第一と説く文、「十住婆沙第三卷」として、『十住毘婆沙論』卷五、易行品第九(『大正蔵』二六、四一頁中、四二頁下)四五頁上に言及)より、称名念仏は易行にして勝れた証果を得られることを説く文を引用する。さらに、『大宝積経』卷九十一(『大正蔵』一一、五二七頁中)および『大集経』卷四月蔵分(『大正蔵』一三、三〇三頁上)より、禪定すなわち三昧の功德が大きいことを説く文を挙げ、一般的な禪定でさえも高く評価されているのだから、禪定の中でも王三昧とされる念仏三昧の功德は極めて大きいと言ふ。ちなみに念仏三昧はすなはちこれ一切の三昧の中の王なるがゆゑに」とある。

(2) 第二問答 禪定を含む前五波羅蜜の功德をいくら重ねても、智慧によって『法華経』を一念信解する功德のほうが大きいと説く、『法華経』分別功德品の教説を挙げ、禪定を越える修行があるのではないかと問う。禪定が最勝であるという第一問答の主張を批判するのである。答えて、四教偏円の差別という立場から、偏行の禪定は偏行の中では勝れているが、円教の如何なる実践にも及ばないと言ふ、円教における智慧を伴う禪定が最勝の実践であることを主張している。

【現代語訳】

第七に、念仏と諸行との優劣について。

問う。往生極樂のための実践の中では念仏が最もすぐれていることはわかったが、往生以外のこと目標とする場合でも念仏が最適であるのか。

答へ。往生以外のこと目標とする修行の中でも、念仏が最もすぐれている。それを明かすため、『観仏三昧経』には六つの譬喩が挙げられている。

「第一の譬喩。釈尊が阿難におっしゃった。長者がまもなく命終わろうとするにあたり、たくさんの蔵を息子に譲った。息子は財産を手にして好き勝手に遊び呆けた。ある時突然、国王の軍隊が攻めてきて、大勢の者が寄ってたかって蔵の財物を掠奪した。たった一つ金の延べ板が残った。その金は、閻浮檀那紫金という最上級品で、重さは十六両、長さは十六寸であった。その一両あたりの価値は他の宝物の百万倍にもなるという。そこですぐにその金を汚い布に包み、泥のかたまりの中に隠した。賊はそれを見ても金だとはわからず、足蹴にして通り過ぎた。賊が去った後、息子は金を手にして大喜びした。念仏三昧もこれと同じで

ある。心の奥にしっかりとしまっておきなさい」と。

第二の譬え。貧者が国王の玉璽を盗んで逃げ、樹によじ登った。国中の軍隊が追いかけてきた。貧者はそれを見て玉璽を呑み込んだ。すぐに兵士がやってきて樹を倒した。貧者は地面にたたきつけられ、身体はばらばらになった。しかし玉璽は傷つかなかった。念仏もこれと同じである。心にきざみつけられ、壊れることがないのである。

第三の譬え。長者がまもなく命終わろうとするにあたり、娘に言った。〈私は宝物を持っている。最高の宝物だ。おまえにやるから、誰にも知られないようにしまっておけ。国王にも感づかれてはならない〉と。娘は父の言うとおり、摩尼宝珠をはじめとする数々の宝物を、きたない場所に隠した。家族にも知らせなかった。飢饉がおこった時、娘は如意宝珠を取り出し捧げて食べ物の名を唱えた。すると様々な馳走が山のように現れた。これと同様、念仏三昧によって心を不動の状態に保つことができたならば、意のままにどんな宝物でも手に入れることができるのである。

第四の譬え。大干ばつで全く雨が降らない時、仙人が呪文を唱えると、その超能力によって天より甘露の雨が降り、地面からは泉が湧き出すようなものだ。念仏することができた者は、仙人のような能力を得るのである。

第五の譬え。たびたび法を犯して牢屋に閉じ込められた力士が、逃げ出して海辺にやってきて、譬の中に隠し持った明月珠の力によって船頭を雇い、向こう岸にたどり着いたならば、心は穩やかで何の心配もないようなものだ。念仏の修行をするものはこの力士のように、心にうずまく煩惱の束縛から解放されて、悟りの岸に到達するのである。

第六の譬え。この世の終わりの大火によって世界が燃え尽きても、金剛山のみは破壊されず、その姿をとどめている。それと同様、念仏三昧を行ずる者は、遠い昔からずっと真如の世界に居続けてきたのである」と以上省略して引用した。

また『般舟三昧経』の問事品に、念仏三昧のことを次のように説いている。「常に学び続け、常に心にとどめて、ほかの教えに随わないようにせよ。念仏三昧は、あらゆる修行の中で最も大きな効果をもたらすものである」と。

また、不退転の境地に到達するのに、難・易二つの過程がある。易行道とは念仏のことである。よって『十住毘婆沙論』の第三に、次のように言う。「我らの世界にも行き難い道と行き易い道とがある。陸上を歩いて行くのは苦しく、水上を船で行くのは楽しい。悟りへの道も同様である。厳しい修行に努める者もあり、また仏の教えにしたがうことによって容易に早く不退転の境地に至る者もある。

中略 阿弥陀仏等の仏や多くの大菩薩の、名を称えてひたすら心に念ずる者も、不退転に至ることができる」と。この文の中には、過去・現在の百余の仏をはじめ、弥勒・金剛藏・浄名・無尽意・跋陀婆羅・文殊・妙音・師子吼・香象・常精進・観世音・勢至等の百余の大菩薩の名が挙げられている。なかでも阿弥陀仏のことは随所に誉め称えられている。あらゆる修行の中で、念仏だけが行い易く、しかも高い境地に到達することができる。よって念仏が最も勝れた修行であることがわかるのである。

また、『大宝積経』の九十二に、次のように説かれている。「たとえ種々の勤めに励み勤しみ、七宝の塔を世界中に建立してくれるような菩薩がいたとしても、私を喜ばせることはできない。またそんなことで私に心からの敬意を捧げたことにはならない。一方、菩薩の修行にふさわしい教えの中の、ほんの一節の偈でも、心にとどめ、読み唱えて、教えの通りに修行し、人に説き示すような菩薩は、私に敬意を捧げたことになる。なぜかと言うと、あらゆる仏の悟りは、多くの教えを聞くことによって芽生えるのであり、ただ勤めに励むだけで芽生えるものではないからである。中略 娑婆世界で勤めに励んでいる菩薩は、教えを読み唱え、修行し、説き示している菩薩の所へ行き、心から敬意を捧げて仕え随いなさい。教えを読み唱え、修行し、説き示している菩薩は、禅定の修行をしている菩薩の所へ行き、心から敬意を捧げて仕え随いなさい。このような善を、仏は心から喜ばれるのである。智慧の修行をしている菩薩に仕え随い、敬意を捧げるならば、この上ない福德が得られるだろう。なぜなら智慧の修行は、菩薩の実践の中で最も勝れ、娑婆でのどんな行いよりも勝れた実践だからである」と。

『大集経』月蔵分の偈に次のように歌われている。

「百億の仏に供養を捧げるよりも

森で静かに七日間

心を凝らして禅定得れば

ずっと大きな功德が得られる中略

心静まりとらわれないのは

仏の悟りのすがたなり

禅定の行者そしめるのは

仏を非難するのと同じ

百千の塔を破壊して

百千の寺を焼くよりも

禅定の行者そしめるのは

大きな罪になるだろう

無量の罪が消滅し

悪道に墮ちることはない

だから私は皆に言う

悟りのために禅定つとめよ

自分つとめられない者は

禅定つとめる者をあがめよ」と。

一般的な禪定でさえも、これほどに評価されているのである。まして最勝の禪定である念仏三昧は、なおさらのことである。

問う。禪定の修行による効果が、經典の読誦や理解による効果よりも勝れているということであるならば、『法華経』分別功德品に、六波羅蜜のはじめの五つ、すなわち布施・持戒・忍辱・精進・禪定の修行を八十万億那由他劫もの間続けた効果と、『法華経』を聞いてほんのわずかでもその教えを理解し信順することの効果とを比較して、前者は後者の百千万億分の一であると説く。ほんのわずかの理解・信順でもこれほどの効果があるのだから、まして『法華経』を広く人々のために説き示すことの効果はさらに大きいだろう。

答え。諸行の一人にはそれぞれ深い・浅いがある。天台教学によれば、釈尊の説法には、「藏教・通教・別教・円教（三乗教・大乘初門の教・大乘深淵の教・完全円満の教）」という四教の段階があり、前三教と円教とは立場が異なるからである。前掲の『大宝積経』『大集経』等には、別教の中において先述のような勝劣を説くのである。しかし四教の全体を視野に入れて比較するならば、前三教における禪定の修行は、『法華経』すなわち円教における読誦等の修行に及ばない。『大集経』『大宝積経』には、別教の立場のみが説かれるが、『法華経』では、四教のすべてを視野に入れて比較がなされている。よって諸経の文に矛盾はない。念仏三昧の教説においても同様である。三昧は、前三教それぞれの中において勝れた修行なのである。円教の行者の三昧は、ほかのどんな修行よりも勝れている。また禪定に二種ある。一つには真実の智慧を伴う禪定で、この禪定が最勝である。もう一つは智慧を伴わない禪定で、これは勝れた修行とは言えない。念仏三昧は智慧を伴う禪定である。



第八に信毀の因縁といふは、『般舟経』にのたまはく、「独り一仏の所にして功德を作るのみにあらず。もしは二、もしは三、もしは十においてせざるにもあらず。ことごとく百仏の所にしてこの三昧を聞き、かへりて後世の時にこの三昧を聞くものなり。経巻を書学し誦持して、最後に守ること一日一夜すれば、その福計るべからず。おのづから阿惟越致に致り、願するところのものを得ん」と。

問ふ(一)。もししからば、聞くものは決定して信すべし。なんがゆゑぞ、聞く

いへども、信じ信ぜざるものある。答ふ。『無量清淨覚経』にのたまはく、「善男子・善女人ありて、無量清淨仏の名を聞きて、歡喜し踊躍して、身の毛起つことをなし、抜け出づるがごとくなるものは、みなことごとく宿世宿命に、すでに仏事をなせるなり。それ人民ありて、疑ひて信ぜざるものは、みな悪道のなかより来りて、殃悪いまだ尽きざるなり。これいまだ解脱を得ざるなり」と略抄。また『大集経』の第七にのたまはく、「もし衆生ありて、すでに無量無辺の仏の所にしてもるもろの徳本を殖ゑたるものは、すなはちこの如来の十力・四無所畏・不共の法・三十二相を聞くことを得ん。乃至下劣の人は、かくのごとき正法を聞くことを得ることあたはず。たとひ聞くことを得とも、いまだかならずしもよく信ぜず」と以上。まさに知るべし、生死の因縁は不可思議なり。薄徳のもの、聞くことを得るも、その縁知りがたし。烏豆聚に一の緑き豆あらんがごとし。ただしかれ聞くといへどもしかも信解せず。これはすなはち薄徳の致すところなるのみ。問ふ(二)。仏、往昔に、つぶさに諸度を修したまひしに、なほ八万歳にこの法を聞きたまふことあたはざりき。いかにぞ、薄徳のたやすく聴聞することを得る。たとひ希有なりと許せども、なほ道理に違せり。答ふ。この義、知りがたし。試みにこれを案じていはく、衆生の善悪に四の位の別あり。一には、悪用偏増なり。この位には法を聞くことなし。『法華』にのたまがごとし、「増上慢の人、二百億劫つねに法を聞かず」と。二には、善用偏増なり。この位にはつねに法を聞く。地・住以上の大菩薩等のこととなり。三には、善悪の交際。いはく、凡を捨てて聖に入らんとする時なり。この位のなかには、一類の人ありて法を聞くことはなはだ難し。たまたま聞きつればすなはち悟る。常啼菩薩、須達が老女等のことし。あるいは魔のために障へられ、あるいはみづからの惑ひのために障へられて、聞見を隔つといへども、久しからずしてすなはち悟る。四には、善悪容預なり。この位には、善悪は同じくこれ生死流転の法なげゆゑに、多く法を聞くこと難し。悪増にあらざるがゆゑに、一向に無聞なるにあらず。交際するにあらざるがゆゑに、聞くといへども巨益なし。六趣・四生に蠢々たる類、これなり。ゆゑに上人のなかにもまた聞くこと難きものあり、凡愚のなかにもまた聞くものあり。これまたいまだ決せず。後賢、取捨せよ。

問ふ(三)。不信のもの、なんの罪報をか得る。答ふ。『称揚諸仏功德経』の下巻にのたまはく、「それ、阿弥陀仏の名号功德を讚嘆し称揚するを信ぜざることありて、誦經するものは、五劫のうちに、まさに地獄に墮して、つぶさにもろもろの苦を受くべし」と。

問ふ(四)。もし深信なくして疑念をなすものは、つひに往生せざるや。答ふ。ま



つたく信ぜず、かの業を修せず、願求せざるものは、理として生るべからず。もし仏智を疑ふといへども、しかもなほかの土を願ひ、かの業を修するものは、また往生することを得。『双卷経』に「たまふがごとし、」もし衆生ありて、疑惑の心をもつてもろもろの功德を修して、かの国に生れんと願じて、仏智・不思議智・不可称智・大乘広智・無等無倫最上勝智を了せず、このもろもろの智において疑惑して信ぜず、しかもなほ罪福を信じ、善本を修習して、その国に生せんと願ぜん。このもろもろの衆生は、かの宮殿に生じて、寿五百歳、つねに仏を見たてまつらず、経法を聞かず、菩薩・声聞の衆を見たてまつらず、このゆゑにかの国土においては、これを胎生たいじゆうといふ」と以上。仏の智慧を疑ふは、罪、惡道に当れり。しかも願に随ひて往生するは、これ仏の悲願の力なり。『清淨覺経』に、この胎生をもつて中輩・下な輩の人とせり。しかも諸師の所釈、繁く出すことあたはず。問ふ(5)。仏智と等いふは、その相いかんぞ。答ふ。懷輿師は、『仏地経』の五法をもつて、いま五智と名づけたり。いはく、清淨法界を仏智と名づけ、大円鏡等の四をもつて、次いでのごとく不思議等の四に當つるなり。玄一師は、仏智は前のごとくなるも、後の四智をもつて、逆に成事智等の四に對するなり。余の異解あるも、これを煩はしくすべからず。

(1) 第一問答 『般舟三昧経』卷上(『大正藏』一三、九〇七頁下)より、經を聞いて信順できるようになるまでには、深淵の因縁を要することを説く文を引用し、經を聞く者は必ず信を生ずることができはずなのに、なぜ信する者と信じない者とが存在するのかと問う。答えて、『平等覺経』卷四(『大正藏』一一、二九九頁中下)および『大集経』卷七(『大正藏』一三、三七頁下)の文を引用する。『平等覺経』には、仏名を聞いて歡喜することができるのは宿世に仏事をなした者であり、惡業の罪が残っている者は、疑いを生ずると言う。『大集経』には、宿世の善根によって正法を聞くことができるのであり、宿善のない者は、聞くことができないか、たとえ聞くことができても信順することはできないと言ふ。これに源信が私見を加えて、薄徳の者でも偶然聞くことができる場合があるが、そんな者は聞いても信解することはできないと述べている。

(2) 第二問答 第一問答を承けて、薄徳の者が聞法できるといふことは道理に合わないと問う。答えて、源信の私見として、衆生を、「①善用偏増、②善用偏増、③善惡交際、④善惡容預」の四段階に分ける説を提示する。①は聞法の縁のない者、②は常に聞法する者である。③は善が惡を滅ぼそうとしている段階で、聖者の域に到達しようとする菩薩がこれに当たる。一旦聞法すれば即座に悟るこ

とができると言ひ、常啼菩薩(般若經守護の菩薩)、須達老女(スタッタに仕える老女毘羅羅。物惜しみの心が強かったが釈尊や羅喉羅の教えに遇つて悟つた)などの例を挙げている。④は善惡が心の中に同居して凡夫を指す。この中に、薄徳でありながら聞法の縁に会うことのできる者がいると言ふのである。ただしこの釈は自ら「未決」と判じ、取捨を後学に委ねている。

(3) 第三問答 不信の罪報を問ひ、『稱揚諸仏功德経』卷下(『大正藏』一四、九九頁上中)の説によって、墮地獄の罪であると答える。迦才『淨土論』卷中(『大正藏』四七、九三頁中)に引用されている。

(4) 第四問答 疑惑の者は往生できないのかと問う。答えて、『無量寿経』卷下(『大正藏』一一、二七八頁上)より、「疑城の胎宮」を説く文を引用する。阿彌陀仏の智慧を疑いながらも、善本を修習して往生を願う者は、胎生の形で極樂に往生すると説かれる。母胎につつまれたような状態で極樂に生まれると言ふのである。したがって長らく仏や聖衆を目の当たりにすることができず、説法を聞くこともできない。阿彌陀仏の智慧は、「仏智(如来の智慧=智慧の總稱)・不思議智(凡夫の考えの及ばない智慧)・不可称智(凡夫の言葉の及ばない智慧)・大乘広智(一切衆生を救う智慧)・無等無倫最上勝智(最強の力をもつ智慧)」という「五智」として示されている。この教説について源信は、疑惑仏智は本来墮地獄の罪であるのに、胎生とはいへ極樂に生まれることができるのは、仏の慈悲によるものであると述べている。加えて、『平等覺経』(卷三、『大正藏』一一、二九二頁中下)等の旧訳には、三輩往生人中の、中輩人・下輩人を胎生の者として言及する。『無量寿経』では、疑惑胎生の者は三輩の外に置かれるので、問題となるのであるが、本項では詳細には議論しないと言ふ。

(5) 第五問答 第四問答に引用した『無量寿経』卷下の文に見える、「仏智」等の五智の意を問う。答えて、懷輿『無量寿経連義述文贊』(『大正藏』三七、一六九頁中下)、玄一『無量寿経記』卷下(古逸)の説を挙げる。順逆の差はあるが、いずれも『仏地経』(『大正藏』一六、七二頁上)に説く、「清淨法界・大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智」の五法に配当している。五法は、唯識經典に説かれる四智に「清淨法界」を加えたもので、四智とは、「大円鏡智(鏡のようにあらゆるものを差別なく映し出す智慧)・平等性智(すべてが平等であることを知る智慧)・妙觀察智(個々の特性を見る智慧)・成所作智(利他の智慧)」を言う。これらはそれぞれ、阿頼耶識・末那識・意識・前五識(眼・耳・鼻・舌・身)が転依して証得されると言ふ。これに「清淨法界(真如そのもの)」を加えて五法とする。

## 【現代語訳】

第八に、念仏を信ずる者と謗る者との相違について。

『般若三昧経』に、次のように言う。「過去においてたった一仏の所で修行したくらいでは、般若三昧の法を素直に聞けるようにはならない。二仏、三仏、あるいは十仏程度でもだめだろう。百仏の所で修行を積み、その百仏すべての所で般若三昧の法を聞き、更に生まれかわってもう一度聞いて、はじめて素直に教えを聞けるようになるのである。そんな者が、この経を書写し、教えを学び、暗唱できるほどに読んで、臨終の日の一昼夜に三昧の状態を保つならば、その功德は絶大である。そのまま不退転に至り、願いを成就することができるだろう」と。

問う。経説によると、法を聞く者は、必ず信順の心を生ずるはずである。なぜ法を聞きながら、信ずる者と信じない者がいるのか。

答え。「無量清浄平等覚経」に次のように言う。「善男善女が無量清浄仏の名を聞いて、喜びに躍り上がり、毛穴が開いて全身の毛が抜けるほどに感動することができるのは、彼らが前世においてすでに仏の活動をしてきたからである。仏の教えを疑い、信ずることができない者は、みな悪道より這い上がってきたばかりで、まだ罪が完全には消えていないからである。だから悟りに至ることができないのである」と省略して引用した。

また『大集経』の第七には、次のように言う。「過去世において無数の仏の所で修行を重ね功德を積んできた者が、如来だけに備わる悟りの智慧や衆生済度の働き、あるいは姿の特徴などについての教えを聞くことができるのである。中略 そうでない愚か者には、そのような正しい教えを聞くことはできない。たとえ聞くことができたとしても、その教えを信じ受け容れることはできない」と。

娑婆の出来事は不可解だということは、みなよくわかっているだろう。徳の薄い者が、教えを聞くことができる、というようなこともあるが、それがなぜなのかはわからない。黒豆の中に緑豆がひとつ混ざっているようなものである。ただし、そんな者が聞いたところで、理解することなどできないのである。それは徳が薄いから、というだけである。

問う。釈尊は前世にあらゆる修行をされたのに、八万年の間、般若三昧の教えを聞くことはできなかったという。なぜ徳の薄い者が、簡単に聞くことができるのか。極めて希なことだと言っているけれども、それでも道理に合わないのではないか。

答え。この問題はとても難しい。試しに私の思うところを述べてみよう。人々の善悪には四つの段階がある。第一に、ひたすら悪ばかりを重ねている者。この

者は仏法を聞くことがない。『法華経』に、「悟ってもいないのに自ら悟ったと慢心する者は、二百億劫かかってもけって仏法を聞くことはできない」と言う通りである。第二に、ひたすら善だけを行う者。この者は常に仏法を聞いている。

聖者の域に達した菩薩たちである。第三に、善と悪とが戦っている状態の者。凡夫の位から聖者の位へと入ろうとする段階の菩薩である。この段階には、法を聞くことが極めて困難な者があるが、たまたま聞くことができたならば即座に悟りを得る。常啼菩薩やスダッタ長者に仕える老女などがそれに当たる。あるいは悪魔のために、あるいは自らの惑いのために、素直に聞くことができない状態であるけれども、やがて悟りに到達することができる者などである。第四に、善と悪とが互いの存在を認め合っている状態の者。この段階の者には、善悪ともに迷いの世界のものであるから、多くの仏法に出会うことは困難である。ひたすら悪ばかりではないから、まったく聞けないことはないけれども、善が悪を滅ぼそうとして戦っているわけでもないで、聞いても大きな利益を得ることはできない。六道に迷い生死を重ねてうごめく生き物がこれに当たる。だから、聖者の中にも聞くことが困難な者があり、凡夫愚者の中にも聞くことのできる者がある。この論義もまた「未決」である。取捨は後学の者に委ねる。

問う。仏法を信じない者は、どのような罪を受けるのか。

答え。「称揚諸仏功德経」の下巻に、次のように言う。「阿弥陀仏の名号に込められた勝れた働きを誉め讃える教説を、信じないで謗る者は、五劫のあいだ地獄に墮ちて、あらゆる苦しみを受けるだろう」と。

問う。仏法を心から信ずることなく、疑いを懐く者は、どうしても往生できないのか。

答え。まったく信じず、念仏することもなく、往生を願わない者は、道理として往生できるはずがない。ただし仏の智慧の働きを疑う者でも、極楽への往生を願って念仏する者は、往生することができる。『無量寿経』に、次のように説かれる通りである。「疑いの心を持ちながら、様々な功德を積み、極楽に往生したいと願う者がいたとしよう。彼は阿弥陀仏の〈五智〉が理解できないのである。つまり仏の智慧が如何に深く、如何に勝れた救済の働きをするものであるかを理解することができず、その働きに対して疑いを懐き、心から仏に身を委ねることができないのである。それでもなお、善悪の行為に報いがあることは信ずることができるので、善行を積んで極楽に往生したいと願っている。そんな者たちは、極楽の中にある〈疑惑人のための宮殿〉に生まれて、五百年のあいだ仏を見ることも説法を聞くこともできない。極楽の聖者たちを見ることもできない。よっ



頭を刺り袈裟を着たるものに与へて、乏しきところならしめん。弥勒、われ、いまた三業相應のもろもろの声聞衆、比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷をもつて、なんぢが手に寄付す。乏しく少なく孤独にして終らしむることなかれ。および、正法・像法に、禁戒を毀破して、袈裟を着たるものをも、なんぢが手に寄付す。かれらをして、もろもろの資具において、乏少にして終らしむることなかれ。また施陀羅王ありて、ともにあひ惱害し、身心に苦を受けしむることなかれ。われ、いまたかのもろもろの施主をもつて、なんぢが手に寄付す」と以上。破戒すらなほしかり。いかにいはんや、持戒をや。声聞すらなほしかり。いかにいはんや、大心を発してまことに念仏せんをや。

問ふ(3)。もし破戒の人もまた天・竜のために護念せられなば、いかんぞ『梵網經』に、「五千の鬼神、破戒の比丘の跡を払ふ」とのたまひ、『涅槃經』に、「國王・群臣および持戒の比丘は、まさに破戒のものを苦治し驅遣し呵嘯すべし」とのたまふや。答ふ。もし理のごとく苦治せば、すなはち仏教に順ず。もし非理にして惱乱せば還りて聖旨に違す。ゆゑに相違せず。「月蔵分」に、仏ののたまへるがごとし。「國王・群臣は、出家のもの、大罪業たる大殺生・大偷盜・大非梵行・大妄語および余の不善をなすを見ては、かくのごとき等の類をば、ただまさに法のごとく、国土・城邑・村落を擯出して、寺にあることを聴さざれ。また僧の事業を同ずることを得しめじ。利養の分、ことごとくともに同せしめざるべし。鞭打することを得じ。もし鞭打せば、理、応せざるところなり。また口に罵辱すべからず。一切、その身に罪を加ふべからず。もしことさらに法に違して、罪を誣めば、この人はすなはち解脱において退落し、必定して阿鼻地獄に帰趣せん。いかにいはんや、仏のために出家して、つぶさに戒を持つものを鞭打せんをや」と略抄。

問ふ(4)。人間の擯治は、差別しかるべし。非人の行は、なほいまだ決了せず。『梵網經』には一向に跡を払ふ、『月蔵經』には一向に供給す。なんぞたちまちに乖角せる。答ふ。罪福の旨を知らんがために、かならずすべからく人の行を決すべし。かならずしも非人の所行を決すべからず。もしは制、もしは開、おのおの巨益をなす。あるいはまた、人の意樂の異なるがごとく、非人の願樂もまた不同なるのみ。学者、決すべし。

問ふ(5)。論のちなみに論をなさん、かの犯戒の出家の人において供養し惱乱せば、いくばくの罪福を得るや。答ふ。『十輪經』の偈のたまはく、  
「恒河沙の仏の、解脱離相衣を破たり、  
これにおいて悪心を起さば、さだめて無間獄に墮ちなん」と袈裟を名づけて「解

脱離衣」となす。

「月蔵分」にのたまはく、「もしかれを惱乱せば、その罪万億の仏身より血を出す罪よりも多し。もしこれを供養せば、なほ無量阿僧祇の大福德聚を得ん」と取意。

問ふ(6)。もししからは、一向にこれを供養すべし。なんぞこれを治して大きな罪報を招くべけんや。答ふ。もしその力ありてこれを苦治せずは、かれまた罪過を得。これ仏法の大きな怨なり。ゆゑに『涅槃經』の第三にのたまはく、「持法の比丘は、戒を破り正法を壞することあるものを見ば、すなはち驅遣し、呵嘯し拳処すべし。もし善比丘、壞法のものを見て、置きて、呵嘯し驅遣し拳処せずは、まさに知るべし、この人は仏法のなかの怨なり。もしよく驅遣し、呵嘯し拳処せば、これわが弟子なり、眞の声聞なり乃至もろもろの國王および四部の衆は、まさにもろもろの学人等を勸励して、増上の戒・定・智慧を得しむべし。もしこの三品の法を学せずして、懈怠破戒にして正法を毀るものあらば、王者・大臣、四部の衆、まさに苦治すべし」と。またのたまはく、「もし比丘ありて、禁戒を持すといへども、利養のためのゆゑに、破戒のものと坐し起し行じ来し、ともにあひ類附して、その事業を同じくせば、これを破戒と名づく乃至もし比丘ありて、阿蘭若處にありて、諸根利ならず、闇鈍蒙管にして少欲にして乞食し、説戒の日および自恣の時に、もろもろの弟子を教へて清淨に懺悔せしめ、弟子にあらざるもの、多く禁戒を犯せるを見ては、教へて清淨に懺悔せしむることあたはずして、すなはちともに説戒し自恣する、これを愚痴僧と名づく」と以上略抄。あきらかに知りぬ、もしは過ぎ、もしは及ばざるは、みなこれ仏勅に違しぬ。そのあひだの消息すべて意を得るにあり。

(一) 第一問答 修行に必要な衣食はどのようにして得ればよいのかと問う。答えて、在家信者は自分で用意すればよいと言ひ、出家行者については自然の恵みや檀越の布施に依存して小欲知足の生活をせよと言ふ。在家信者の例として挙げられた瑠璃王は、在俗の仕事が多忙であつたために修行に打ち込むことができなかつたが、釈尊の教えによつて木楳子の数珠を携えて常に仏を念じたと言ふ(『木楳子經』、『大正藏』一七、七二六頁上)中、本講読(七)九七〜九八頁参照)。出家行者の上根の例として挙げられた雪山童子は、施身聞偈の譬喩話で有名であるが、ヒマラヤの山中で木の実を食して修行に励んでいたという(北本『涅槃經』卷十四、『大正藏』二二、四四九頁中)。以上の典拠として、『摩訶止観』卷四上(『大正藏』四六、四一頁下〜四二頁上)の参看を求めている。次に挙げる、『大

『智度論』卷二十八（『大正藏』二五、二六五頁下）には、貪求する者は供養を得られない等と説き、『大集經』卷五十一（『大正藏』一三、三四五頁下）には、正法に順って三業相應の修行をする者には、神々が護持養育して必要な物を供給する等と説く。貪欲を離れて正しい修行をすれば、衣食は自然に備わるといふ見解が表明されているのである。

(2) 第二問答 三業不相応の凡夫には援助はないのかと問う。答えて、それは怠け者の質問だと叱責しながらも、出家の恰好をしただけの破戒の名字比丘でも供養を受けることができることと説く、『大集經』卷五十三（『大正藏』一三、三五四頁上）中、三五五頁中（下）、卷五十六（同、三八一頁上）中）の文を挙げる。

(3) 第三問答 第二問答によると破戒の罪は許されるようであるが、破戒を許さない、『梵網經』卷下（『大正藏』二四、一〇〇九頁上）、北本『涅槃經』卷三（『大正藏』一一、三八〇頁下）（三八一頁中）の説を挙げ、その相違について問う。答えて、律蔵の規定に従って処罰するのは良いが、規定を越えてことさら苦痛を与えることがいけないのだと言ひ、『大集經』卷五（『大正藏』一三、三五九頁中（下））の文を略抄する。

(4) 第四問答 諸天・龍神・鬼神等は、破戒の者を罰したり、許して供養を捧げたりと、態度が一定しないのはなぜかと問う。答えて、罰則規定を明確にすることとは、人間には必要であるが、諸天等には不要であると言ひ。諸天の場合、賞罰いづれの判断をしても、大きな利益をもたらすからである。また、態度が一定しないのは、単に意図がまちまちなだけかもしれないと言ひ。ただし結論は後学に委ねている。

(5) 第五問答 破戒僧に対し、供養を捧げる者と愾乱を与える者との得る罪福の大きさを問う。答えて、袈裟を着けた者に悪意をいだくことは墮無間地獄の罪に当たると説く、『地藏十輪經』卷四（『大正藏』一三、七四二頁下）の文と、愾乱には出仏身血以上の罪があり、供養には無量の福德があると説く、『大集經』卷五十四、月蔵分（『大正藏』一三、三五九頁中）の文とを挙げてゐる。

(6) 第六問答 前問答を承けて、破戒僧の正しい対処法を問う。答えて、処罰の能力を持つ者は、正しく処罰しなければならぬと言ひ、北本『涅槃經』卷三（『大正藏』一一、三八一頁上）中）の文を挙げる。最後に私見として、度を過ぎた処罰も、罪を放置することも共に仏意に反することであると述べてゐる。

### 【現代語訳】

第九に「助道資縁（し）」、修行者を支える生活の拠り所について

問う。凡夫の行者には、着るものと食べるものが必要である。些細なことかもしれないが、大切なことである。裸のまま腹を空かせて、心が安定しないようでは、仏道などほど遠いではないか。

答へ。行者に二種ある。在家と出家とである。在家の人は、意のままに家業にいそしみ、食べ物や着る物に不自由しない。よって衣食の不足のために念仏を妨げられることはない。『木槵經』に登場する瑠璃王のようなものである。一方、出家にはまた三種ある。上級者は、草に座り、毛皮を着、わずかな野菜と木の実を食する。『涅槃經』に登場する雪山童子（せっせんどうし）のような行者である。中級者は、施されたものを食し、ぼろ切れを縫い合わせて着物を作る。初級者は、在家信者の施しによって衣食を得る。ただし少しの量で満足しなければならぬ。詳細は『摩訶止観』の第四に説かれている。まして仏弟子として正しい仏道を修め、貪りの心を持たない者は、求めずとも生活の糧は備わるものである。それについて『大智度論』に、次のように説かれている。「貪り求める修行僧は、施しを受けることができぬ。貪り求める心がなければ、わずかの施しでも不足を感じることがない。心も同様である。自分勝手な判断で物に執着すると、真如を体得することはできない」と。

また『大集經』月蔵分に、六欲天の神々や、日・月・星の神、龍神たちが、それぞれ積尊の前で誓願を發して、次のように述べてゐる。「仏弟子の中に、仏法を守り、仏法に順ひ、全身全霊を傾けて修行に励む人がいたら、我らは皆ともに、その人を守り育て、必要な物を用意して不足のないようにします。また貪り蓄えることのない修行者も、同じように守り育てたいと思ひます」と。

また同じ経に、続いて次のように言う。「仏弟子の中に、貪り蓄え、修行に励まない人がいたら、そんな人は見捨てます。援助もしません」と。

問う。凡夫は常に全身全霊を傾けて修行に励むことができるわけではない。もし衣食に事欠くようなことがあれば、心細かろう。

答へ。そのような質問は、真剣に悟りを求める心のない怠け者の言うことである。もし心の底から悟りを求め、浄土への往生を願う者は、命を捨てようとも戒めを破るようなことはほしやう。一生涯努力を重ねて、遙か先の世での悟りを願うという態度が、修行者本来のすがたであろう。それでもなお、たとえ戒めを破る者にさえ、援助がないわけではないと説かれるのだから、いよいよ行者は衿を正さねばならない。同じく『大集經』に、積尊が次のようにおっしゃる通りである。「私の教えによつて出家し、鬚髮を剃つて袈裟を着ける者は、たとえ戒めを守ることができなくても、やがて皆必ず悟りに到達できるということを約

束しよう。もし、出家して戒めを守らない行者に対して、非人道的な精神的圧力を加えて罵り辱め叱りつけ、刀や棒をもって打ち据え切り裂き、あるいは生活に必要な物を奪い取るなどの罰を与えるならば、その者こそが、過去・現在・未来のあらゆる仏がその真実の願いを実現するために顕したすがたに傷をつけているのであり、それによってすべての神々や人々が仏のすがたを見る機会を奪い取っているのである。彼の行為は、諸仏が教導の手段とする三つの宝、すなわち《仏のすがた》《仏の教え》《教えを伝える人々の集い》を隠してしまうようなことだからである。また、すべての神々や人々が仏の恵みを得ることができず、地獄に墮ちてしまうという結果を招く行為であり、地獄・餓鬼・畜生の世界を広げ、そこに罪人を満ちあふれさせるような行為だからである。そう釈尊が説かれた時、すべての諸天・龍神から悪鬼・妖怪に至るまで、皆が合掌して次のように言った。《我らは、釈尊の弟子たちすべてに対し、たとえ戒めを守らない人でも、鬚髪を剃り、袈裟のようなものでも身に着けているならば、師として敬意を払い、守り育て、必要な物を施して、不自由のないようにします。もし他所の諸天・龍神や悪鬼どもが、仏弟子に精神的苦痛を与えるような場合はもちろん、単に悪意の目を向けるだけであったとしても、我らは、奴らをこてんばんにやっつけてやります。我らと共に生活することも、共に笑い合うこともできないようにしてやります。この世界から追放してやります》と。

また同じ経に、次のように言う。「その時釈尊は長老弥勒菩薩をはじめ、この世のすべての菩薩たちに対して告げられた。《みんな聞いてくれ。私が昔、菩薩の修行をしていた時、その当時の諸仏如来に対して敬いの心をもってお供えをし、その善行を、私が無上の悟りを得るための因とした。私は今、目の前の多くの者のことが心配なので、自分が修めた善行の果報を三つに分けたいと思う。その一つはそのまま私の分として受けることにし、二つ目は、私が入滅した後、禪定を求めて邁進する修行者に与えて、彼らが生活に困らないようにしたいと思う。三つ目は、戒めを守らずに、経典を読み唱えるだけの者や、私が入滅した後、私の教えが正しくあるいはかろうじて受け継がれている時代に、仏弟子の真似をして髪を剃り、袈裟を着ける者に与え、彼らが生活に困らないようにしようと思う。弥勒よ、私は今、全身全霊を傾けて修行に励む仏弟子たちや、修行者、在家信者たちのことを、あなたの手に委ねたい。彼らが生活に困窮して一人寂しく死んでゆくことのないようにしてほしい。それから、私の教えが正しくあるいはかろうじて受け継がれている時代に、戒めを破りながらも袈裟を着けているような者も、あなたの手に託したい。彼らも、衣食に不自由をして貧しく一生を終えるような

ことがないようにしてほしい。また、悪王のもとで互いに傷つけ合い、身心の苦痛を受けることがないようにしてほしい。よって私は今、諸天・龍神をはじめとするすべての援助者達をも、あなたに預けようと思う」と。戒めを破る者でさえも、このように保護されるのである。まして戒めを守るものは言うまでもない。声聞でさえも護られるのだから、まして菩提心を発して懸念に念仏をする菩薩はおさらである。

問う。戒めを破った人でも諸天・龍神に保護されると言うが、それではなぜ『梵網経』に、「五千の鬼が、戒めを破った人が歩いた汚らわしい足跡を掃き清める」と言い、「涅槃経」に、「国王・役人や、戒めを守る修行者は、戒めを破る人を処罰し、追い払い、叱りつけるだろう」と説かれるのか。

答え。律蔵の規定に従って処罰するならば、釈尊の教えに順うものと言える。規定を逸脱して苦痛を与えるならば、釈尊の教えに反するものである。よって両説は矛盾しない。『大集経』月蔵分に、釈尊が次のように説かれる通りである。

「国王や役人は、出家の修行者が人を殺し、人の大切な物を盗み、邪淫に耽り、悟ったと偽って人を陥れるなどの罪を犯すのを見たら、彼らを法律に則って国や町や村から追い出し、寺に居住することを許してはならない。また教団の仲間と活動を共にしたり、施しを受けたりしてもいけない。ただし鞭打ってはならない。鞭打つことは律蔵の規定に反することである。また罵倒してもいけない。体罰は一切禁止である。もし律蔵の規定に反するような処罰をしたならば、その者は、悟りへの道を断たれ、必ず阿鼻地獄に墮ちるだろう。まして仏の教えに順って出家し、すべての戒めを正しく守っている人を鞭打つ者はなおさらである」と省略して引用した。

問う。教団追放等の処罰の妥当性について、人間については律蔵の規定に照らして判断することができるが、諸天・龍神や鬼などの判断基準は不可解である。

『梵網経』には、皆そろうて汚れた足跡を掃き清めると言い、「月蔵経」では、皆そろうて衣食を捧げると言う。どうしてこれほどの違いがあるのか。

答え。人が判断する場合は、罪悪か福德かが分かるように、その基準をきちんと定めておかなければならない。しかし諸天・龍神や鬼の場合は、それほどはっきりさせておく必要はなからう。諸天等の場合は、罰を与えても、供養を捧げても、共に大きな利益をもたらすことになる。あるいは人間の考えがまちまちであるのと同じように、諸天等にも様々な意図があり、そのために罪福の判断がばらばらなだけなのかもしれない。この問題については、後学の者に結論を委ねたい。

問う。前の問答を承けて敢えて問うが、戒めを破った出家行者に対して、供養を捧げる者や苦痛を与える者には、どれほどの罪科あるいは福德があるのか。

答え。『地藏十輪經』の偈に、次のように歌われている。

「多くのほとけが身につけた

悟りのしるしの袈裟だから

それを着ている修行者に

悪意をいだけば地獄行き」と袈裟のことを

を「解脫幢衣」すなわち悟りのしるしの衣と言う。

『大集經』月蔵分には、次のように言う。「戒めを破った修行者に苦痛を与える罪は、無数の仏の身より血を流させる罪よりも思い。逆に供養を捧げるならば、この上なく大きな福德が得られるであろう」と。

問う。そうであるならば、ひたすら破戒僧を供養すれば良いではないか。なぜわざわざ彼を懲らしめて、罪を作らなければならないのか。

答え。懲らしめる能力があるのに、懲らしめないならば、それはまた罪になる。仏の教えに対する大いなる反逆行為なのだ。そのことは、『涅槃經』卷三に、次のように説かれている。「教えを守る修行者は、戒めを破って仏の教えに泥を塗る者を見たら、すぐに教団から排除し、叱責し、処罰しなければならぬ。たとえ自身は教えを守っていても、破戒者を見て放置し、叱責・排除・処罰をしない者は、仏の教えに対する反逆者だということを認識せよ。排除・叱責・処罰することが出来る者が私の弟子であり、真の修行者なのである。中略 諸国の王ならびに仏道修行者・信者たちよ。多くの修行者を激励して、ますます戒めを守り、禪定を修め、智慧をみがくよう指導せよ。戒・定・慧の実践を学ばず、怠惰にして戒めを破り、正しい仏法を誘う者がいたならば、国王・大臣および修行者・信者たちは、彼らを処罰しなければならぬ」と。

また同じ経に、次のように言う。「自身は戒めを守っている修行者が、生活の糧を得るために、破戒者と起居を共にし、親しく交わり、一緒に修行するならば、彼もまた破戒者と呼ばなければならぬ。中略 静寂なる修行林に住み、感性も知性も鈍く、欲も少なく施食によって暮らす修行者がいたとしよう。彼は、月例の集會や年に一度の法會の際に、弟子を指導して正しく懺悔させるけれども、自分の弟子でない者には、正しい懺悔の方法を教えることができない。それでも一緒に月例集會や年次法會に参加させる。そのような者を愚かなる修行者と言うのである」と以上は省略して引用した。処罰は、過ぎては足らなくても、どちらも仏の教えに背く行為であることが分かったであろう。以上の議論はすべて仏の真意を知るために設けたものである。

第十に助道の人法といふは、略して三あり。一には、すべからく明師の、内外の律に善くして、よく妨障を排除するに、恭敬し承習すべし。ゆゑに『大論』には、く、「雨の墮つるに、山の頂に住まらずしてかならず下れる処に帰するがごとし。もし人、憍心をもつてみずから高くすれば、すなはち法水入らず。もし善師を恭敬すれば、功德これに帰す」と。二には、同行の、ともに験を渉るがごときを須める。すなはち臨終に至るまで、たがひにあひ勸励せよ。ゆゑに『法華』にのたまはく、「善知識はこれ大の因縁なり」と。また『阿難のいはく、善知識はこれ半の因縁なり」と。仏ののたまはく、へしからず、これ全の因縁なり」と。三には、念仏相應の教文において、つねに受持し披讀し習学すべし。ゆゑに『般舟經』の偈にのたまはく、

「この三昧經は眞の仏語なり。たとひ遠方にこの經ありと聞かば、道法を用ゐるがゆゑに往きて聴受し、一心に諷誦して忘捨せざれ。

たとひ往きて求むるに聞くことを得ずとも、その功德の福は尽すべからず。

よくその徳義を称量することなからん。いかにいはんや聞きをはりてす

なほち受持せんをや」と四十里・百里・千里をもつて遠方となす。

問ふ(一)。なんらの教文か、念仏に相應する。答ふ。前に引くところの、西方の証拠のごときは、みなこれその文なり。しかも、まさしく西方の觀行ならびに九品の行果を明かすことは、『觀無量壽經』一卷、彌勒耶舍の訳にはしかず。弥陀の本願ならびに極楽の細相を説くことは、『双卷無量壽經』二卷、康僧暹の訳にはしかず。諸仏の相好ならびに觀相の減罪を明かすことは、『觀仏三昧經』十卷あるいは八卷、寶賢の訳にはしかず。色身・法身の相ならびに三昧の勝利を明かすことは、『般舟三昧經』三卷あるいは二卷、支婁迦の訳「念仏三昧經」六卷あるいは五卷、功德直、支輪とともに訳すにはしかず。修行の方法を明かすことは、上の三の經ならびに『十往生經』一卷『十住毘婆沙論』十四卷あるいは十二卷、龍樹の造、羅什の訳にはしかず。結偈総説は、『無量壽經優婆塞願生の偈』あるいは『淨土論』と名づく。あるいは『往生論』と名づく。世親の造、菩提留支の訳、一卷にはしかず。日々の誦誦は、『小阿彌陀經』一卷五紙、羅什の訳にはしかず。修行の方法は、多く『摩訶止觀』十巻および善導和尚の『觀念法門』ならびに『六時の禮讚』のおのおの一卷にあり。問答料簡は、多く天台の『十疑』一卷道綽和尚の『安樂集』二卷慈恩の『西方要決』一卷懷感和尚の『群疑論』七巻にあ

り。往生の人を記することは、多く迦才師の『浄土論』三巻ならびに『瑞応伝』一巻にあり。その余は多しといへども、要はこれに過ぎず。

問ふ(2)。行人みづからかのもろもろの文を学すべし。なんがゆゑぞ、いま勞しくこの文を著すや。答ふ。あに前にいはずや。予がごときものは、広文を披きがたし。ゆゑにいささかにその要を抄す。

問ふ(3)。『大集経』にのたまはく、「あるいは経法を抄写するに、文字を洗脱し、あるいは他の法を損壊し、あるいは他の経を闕蔵す。この業縁によりて、いま言の報を得たり」と云々。しかるをいま経論を抄するに、あるいは多くの文を略し、あるいは前後を乱る。これ生旨の因なるべし。なんぞ自害することをなさんや。答ふ。天竺・震旦の論師・人師、経論の文を引くに、多く略して意を取る。ゆゑに知りぬ、経の旨を錯乱するはこれ盲の因たるも、文字を省略するはこれ盲の因にあらず。いはんや、いま抄するところは、多くは正文を引き、あるいはこれ諸師の所出の文なり。繁文を出すことあたはざるものに至りては、注して、あるいは「乃至」といひ、あるいは「略抄」といひ、あるいは「取意」といへり。これすなはち学者をして本文を勘へやすからしめんと欲してなり。

問ふ(4)。引くところの正文はまことに信を生ずべし。ただししばわたくしの詞を加す。いかんぞ人の誇りを招かざらんや。答ふ。正文にあらずといへども、理をば失せず。もしなほ謬ることあらば、いやしくもこれを執せず。見るものを取捨して正理に順せしめよ。もしひとへに誇りをなさんば、またあへて辞せず。『華嚴経』の偈にのたまふがごとし。

「もし菩薩の、種々の行を修行するを見て、善・不善の心を起すことあるを、菩薩みな撰取す」と以上。

まさに知るべし、誇りをなすもまたこれ結縁なり。われもし道を得ば、願はくはかれを引撰せん。かれもし道を得ば、願はくはわれを引撰せよ。すなはち菩提に至るまで、たがひに師弟とならん。

問ふ(5)。論のちなみに論をなさん、多日、筆を染めて身心を劬勞す。その功なきにあらじ。なんの事をか期するや。答ふ。

このもろもろの功德によりて、願はくは命終の時に、弥陀仏の無辺の功德の身を見たてまつることを得ん。われおよび余の信者、すてにかの仏を見たてまつりをはらば、願はくは離垢の眼を得て、無上菩提を証せん。

往生要集 卷下

永観二年甲申冬十一月、天台山延暦寺首楞嚴院にして、この文を撰集す。明くる年の夏四月に、その功を畢ふ。一の僧ありて夢みらく、毘沙門天、両の紳童を將て、来り告げていはく、「源信が撰せるところの『往生集』は、みなこれ経論の文なり。一見・一聞の偏は、無上菩提を証すべし。すべからくして一偈を加へて、広く流布せしむべし」と。他日に夢を語る。ゆゑに偏を作りていはく、

すでに聖教および正理によりて、衆生を勧進して極楽に生ぜしむ。乃至展転して一たびも聞くもの、願はくはともにすみやかに無上覺を証せん。

(1) 第一問答 「念仏の修行者を支える人と聖教」という標題のもと、初めに「師・友・聖教」という三つの項目を掲げ、すぐれた師に仕えることが重要であることを説く、『大智度論』卷四十九(『大正蔵』二五、四一四頁中)の文、善友同行を尊ぶべきことを説く、『法華経』卷七(『大正蔵』九、六〇頁下)および『付法藏因縁伝』卷六(『大正蔵』五〇、三二二頁上)の文、聖教の文を大切にすべきことを説く、『般舟三昧経』卷下(『大正蔵』一三、九一八頁上)の文を挙げている。その上で本項では、「念仏の法門を明示するために聖教の文を列挙する」という『往生要集』撰述の意図に照らして、本書における聖教引用の態度について議論を展開している。

その第一の問いとして、まず念仏の法門相應の聖教の文は何かと問う。答えて、大文第八「念仏証拠」に挙げた十文に加えて、『観無量寿経』『無量寿経』『観仏三昧海経』『般舟三昧経』『念仏三昧経』『十往生経』『阿弥陀経』の七経、『十住毘婆沙論』『無量寿経優婆塞提舍願生偈』の二論、天台『摩訶止観』、善導『観念法門』『往生礼讃』、天台『十疑論』、道綽『安樂集』、慈恩『西方要決』、懷感『群疑論』、迦才『浄土論』、少康・文診『往生西方浄土瑞応刪伝』の九書を挙げ、ほぼこれに尽きると述べている。

(2) 第二問答 第一問答に挙げた聖教の文を、行者が直接読めば、本書は不要ではないのかと問う。答えて、序文に述べた通り、本書は、自ら聖教を開くこともできない「予がごとき頑魯のもの」のために、「念仏の一の門によりて、いささか経論の要文を集」めた書であると言ふ。

(3) 第三問答 経論章疏の文を意図的に省略して抜き出すことの罪について問



う。答えて、文意を錯乱することは罪だが、文字の省略は罪ではないと言い、また本書では、原文に忠実に引用すること、あるいは先師所引の文を掲げるときを旨とするが、それができない場合でも必ず註を挟んで省略あるいは取意していることを明示していると言う。ところで、ここに引用された、『大集経』巻四十四（『大正蔵』一三、二九〇頁下）の文に、経論の文に意図的に手を加えることは、盲目の報いを受ける罪であると言う。この文は、道世『法苑珠林』巻十七（『大正蔵』五三、四一五頁下）等にも見える。経論の文言を操作することは罪であるという教説は理にかなっている。しかし、その罪によって盲目の報いを受けるといふのは、差別によって人の尊厳を傷つける、間違った教説である。仏典にしばしば見られるこのような差別思想は、見逃すことなく指摘し、批判しなければならぬ。

(4) 第四問答 著者の私見を加えることは非難されるのではないかと問う。答えて、真理に背いてはいないと思うが、もし誤りがあれば、読者が自由に改めよと言う。さらに、八十巻本『華嚴経』巻七十五（『大正蔵』一〇、四二二頁下）の偈を引いて、非難する者とも縁を結び、ともに仏道の成就に向かって助け合おうと述べている。

(5) 第五問答 『往生要集』撰述の功德として何を期待するかと問ひ、『宝性論』巻四（『大正蔵』三一、八四八頁上）に見える回向文を依用して、自身の臨終見仏および同行と共に見仏成仏することを願う偈を掲げ、全体の結びとしている。『宝性論』の回向句は、迦才『浄土論』巻中（『大正蔵』四七、九六頁中）に、往生浄土の道理を説く、十二部経七部論の文の一つとして挙げられている。

### 【現代語訳】

第十に、念仏の実践を支える人と聖教について。

簡略に、三つの項目を立てる。第一には、あらゆる学派の規則に通じ、修行の障りを取り除いてくれる、すぐれた師をえらび、敬いの心を捧げて師事せよ。これについて『大智度論』に、次のように言う。「雨水は山頂にとどまてはいない。必ず低いところに向かって流れてゆく。それと同様、おごり高ぶった人には教えの水は注がれない。善き師に対して、わが身を低くして敬いの心を捧げるならば、福德は自身に集まるだろう」と。

第二に、同行の者を見つけて、共に険しい道を行くように努めよ。臨終の時まで、互いに切磋琢磨せよ。これについて、『法華経』には、「良き法友は、仏道成就のために不可欠である」と説き、また、「阿難が、法友は、仏道成就の要因の

半分を担うものですな」と言う。と、積尊は、（へいや、すべてだ）とおっしゃった」とも言われる。

第三に、念仏の教えを説く聖教の文を、常に心に保ち、読み、学習せよ。これについて『般舟三昧経』の偈に、次のように歌われている。

「仏のまことを説くこの経は  
自ら求めて聴聞し  
たとえ聴聞できずとも  
その福德ははかりしれない  
里・百里・千里を「遠く」というのである。

問う。どのような聖教の文が、念仏の教えを説いているのか。  
答え。「念仏証拠」の章に挙げた経論の文はすべて、念仏の教えを説くものである。加えて、西方極楽浄土の依正を観念する方法ならびに往生人の九段階の様相を明かす点では、『観無量寿経』一卷、再良耶舍の訳が最も勝れている。阿弥陀仏の本願ならびに極楽の詳細の様相を説くことでは、『無量寿経』二巻、康僧鎧の訳が随一、諸仏のすばらしい姿や、観念による滅罪については、『観仏三昧海経』十巻あるいは八巻、普賢の訳が随一である。仏の具体的な姿や真如そのものとしての仏について、および三昧のすぐれた効果を明確に説く点では、『般舟三昧経』三巻あるいは二巻、支婁迦の訳や、『念仏三昧経』六巻あるいは五巻、功德貞、玄暢とともに訳すが勝れ、修行の方法を明かすことでは、右の三経と、『十往生経』一卷、『十住毘婆沙論』十巻あるいは十巻、龍樹の造、羅什の訳が良い。偈を説いて教えを簡潔に示す点では、『無量寿経優婆塞提舍願生偈』あるいは『浄土論』と言ひ、あるいは『往生論』と言ひ、世親の造、菩提留支の訳、一巻が一番である。毎日唱えるには、『小阿弥陀経』一卷五紙、羅什の訳が最適である。修行の方法については、『摩訶止観』十巻および善導『観念法門』

「往生礼讃」各二巻に説かれている。問答による教理上の議論は、天台『十疑論』

一巻、道綽『安樂集』二巻、慈恩『西方要決』一巻、懷感『群疑論』七巻に多くのことが述べられている。往生人の伝記は、迦才『浄土論』三巻や『瑞応伝』一巻に多くの記載がある。そのほかにもたくさんあるが、重要なものは以上である。

問う。行者自身が、直接これらの聖教の文を学ぶべきであろう。なぜわざわざ本書を著す必要があるのか。

答え。序文に述べたとおりである。私のような愚か者には、たくさんのお聖教を開くことは困難である。だから少しでも集めて要約して提示したのである。

問う。『大集経』に、次のように言う。「経論章疏の文を抜き書きするにあたり、意図的に文字を書き落とし、都合の悪い文言を削り、あるいは意に添わない経を

無視するなどの行いによって、現在目が見えないという報いを得たのである」と。本書では、経論の文を省略して引用する際、多くの文言を削ったり、前後を入れ替えたりしている。盲目の報いを得ることになる。なぜ自らを傷つけるようなことをするのか。

答え。インド・中国の論師・人師は、経論の文を引用する際、省略・取意することが多い。よって、経の趣旨を曲げることは盲目の因となるかもしれないが、文字を省略するだけなら盲目の因とはならないことは明らかである。まして本書においては、省略せずに引用するか、あるいは先師所掲の文を挙げることを基本としている。全文を引用するのが困難な場合は、「乃至」を挟んだり、あるいは「略抄」「取意」と書き添えるなどしている。それは読者が原文を参照しやすいように配慮したためである。

問う。省略せずにきっちり引用された聖教の文は、確かに信順の心を生じさせるものと言える。しかし、本書にはしばしば著者の私見が加えられている。それが非難を受けることもあろう。

答え。私見を加えていても、真理に背いてはいない。もしも誤りがあれば、けっして自説に固執することはない。読者が自ら取捨して、真理に契うように改めてほしい。それでもまだ非難するというのなら、それもまたよかろう。『華嚴経』の偈に、次のように歌われている。

「菩薩が種々の修行をするのを

人があれこれ批評して

善意を寄せても悪意を向けても

菩薩はすべてを許すだろう」と。

非難を向けることもまた、縁を結ぶことなのだとということが分かるだろう。もしも私が悟りを得たならば、私を非難した者を救いたいと思う。もし私を非難した者が悟りを得たならば、どうか私を救ってほしい。悟りの完成にいたるまで、互いに師弟となろうではないか。

問う。それでは敢えて問うが、長いあいだ筆をもって机に向い、身心をすり減らしてきた、その苦勞が報われるとしたならば、どんなことを期待するか。

答え。

この書を選んだ功により

命の尽きるその時に

無辺の功德が備わった

阿弥陀の姿を拝みたい

共につとめた仲間とともに

仏をしっかりと拝んだのちに

煩惱の雲を消し去って

智慧の目を得て仏になりたい

以上、往生要集 巻下。

永観二年甲申冬十一月、天台山延暦寺首楞嚴院において、この書を著しはじめ、翌年夏四月に完成した。そのとき一人の僧の夢に、毘沙門天が二人の童子を連れて現れ、次のように告げられたという。「源信が著した『往生要集』は、すべて経論の文からなる。一度でも見聞きした者は、無上の悟りを得ることだろう。最後に偈を一つ加えて、広く流布させよ」と。後日、この僧が私の所にやって来て夢のことを語った。よって次のような偈を加えよう。

聖教正義を書き連ね

往生極樂せよと説く

この書に出遇う人皆と

共に悟りを成就せん

(完)